

駅から少し離れた個人経営のカフェで、私はマッチングアプリで知り合った朝倉さんと初めて会った。

やってきた朝倉さんはプロフィール写真のままの人懐っこい笑顔で、すっと伸びた背筋とふんわりとした自然な茶髪で、実物は写真よりずっとかっこよかった。

「いえ、私も今来たところです」

「よかった。座ってもいい？」

「もちろんです」

向かいに腰を下ろした朝倉さんは、明るくて距離感が近く、すぐに場の空気を和ませる。メッセージどおり話しやすく、自然と警戒心がほどけていった。

コーヒーを頼み、少し話したあと、彼が身を持ち出して言う。

「ちょっと面白いゲーム、しない？」

「ゲーム、ですか？」

「うん。実は俺、催眠術が使えるんだよね」

冗談めいた調子に、思わず笑ってしまう。

「本当ですか？」

「じゃあ、実際に体験してみる？」

「そうですね……お願いします」

深く考えずにそう答えた私に、朝倉さんは穏やかに続けた。

「催眠術をかけるときに一つ注意点があるんだ」

「注意点、ですか？」

「そう。催眠術は一度始めたら途中で止められないんだ。だから、最後までいくよ」

「そうなんですか？ わかりました」

「じゃあ、楽にして。椅子に深く座って……目、閉じてみて」

「ここで、ですか？」

「大丈夫。誰も気にしてないしさ」

店内には他の客もいたけれど、その言葉に背中を

押され、私はそっと瞼を閉じた。

「今から俺の声だけ聞いて。ほかの音は遠くのBGMみたいにして」

不思議と、彼の声だけがくっきり耳に残る。

「そうそう……俺の言うことを、そのままやってね」

「はい……」

言われるほどに思考がゆっくりほどけていく。

「君は今から、俺の言葉に素直に応える。はいつて言って、ちゃんとやるんだ。ほら、呼吸も自然に。吸って……吐いて……」

胸が上下し、体の感覚ははっきりするのに、頭はぼんやりしていく。

「いいね。そのまま……」

パチン、と朝倉さんが指を鳴らした。

「……じゃあ」

「今のでスイッチが入ったよ。もう俺の指示に従えるね？」

「はい」

(……え?)

自分の返事に、少し遅れて気づいた。意識はあるのに、口だけが先に動いたような感覚が残っていた。

声に出た自分の返事を、少し遅れて耳が拾う。

身体が勝手に返事をした。まるで私の意識と身体が切り離されたような感じだった。

「うんうん、かかったね。じゃあここ出ようね。立って。行くよ」

「はい」

（え、え。身体が勝手に動いちゃう。それに、どこに行くの……？）

カフェを出て連れて行かれた先は、公園だった。もうじき夜になるこの場所には子どもも大人も誰一人いなかった。そんな場所に何の用事だろう。

「じゃあ、トイレ入ろうね。女性トイレに入れてあげたいけど、万一誰か入ってきたら困るからこっちね」

「はい」

そう言われ、数少ない電灯を目印にするかのような場所にある、男子トイレに連れて行かれた。

（なんでこんなところに……誰もいなくてよかったけど……）

幸い中には誰もおらず、一安心した私の手首を、朝倉さんが驚くほど自然な動作で掴んだ。そして「

大丈夫だよ～」と、軽く流すような口調で、ずるずると私を個室の中へと連れて行く。

混乱する私をよそに、彼は私の背後に回り込むと、後ろからズボンのボタンに指をかけた。

(何して……っ！)

「いきなりナカにつけるのはちょっとかわいそうだからね」

「はい」

(……っ、逃げなきゃ……！)

そう思うのに、身体が動かない。

ウエストゴムのズボンとパンツが一緒に下ろされた。冷たい空気が肌に触れる。抵抗することもできず、剥き出しになった秘部に、彼の指先がツン♡と触れた。

「ひゃうっ！？」

「大丈夫、大丈夫」

そう言う朝倉さんの囁きが、耳元で甘く響く。
温かな指がクリトリスをちょんちょんと指先でつ
ついた。

「んっ、んんっ……♡」
(やだ、どこ触って……っ！)

朝倉さんは「うんうん」と親身そうに頷きながら、
クリトリスを捏ねるようにして弄ってくる。

こり、こりっ♡ぬりゅ……ぬちゅう……♡

(っ、や、やめて……っ！はずかしい、はずかし
いのに……っ)

「あ、あぁっ……！♡んうっ……！♡あ、あ……
っ♡」

むにっ♡むにい……♡

朝倉さんがクリトリスを下から持ち上げるように
して、弾力を楽しむようにしてむにむにと揉む。離
して欲しいのに、私はされるがままで声を出すこと

しかできない。

「ひゃっ♡ あ、あぁっ！♡」

(うそ……どうしようっ。身体が自由に動かない。催眠術って本当だったの？ どうしよう、これ、いつまで続くの？ 男子トイレの個室で、会ったばかりの男の人にクリいじられてる……。やだ、恥ずかしい……！)

「ほらー、もっと足開いて腰突き出して。クリ前に出して」

「あ、んぁっ！♡」

(そ、そんな……！ きゃっ……！♡)

ぎゅっ♡ ぷにっ♡

足を無理やり広げられ、クリトリスを摘ままれ、ピン♡ と弾かれる。

(あ……っ、やだ、ガニ股、恥ずかしい……はずか

しいのに、朝倉さんに触られると感じいちゃう……)

朝倉さんは満足そうに微笑みながら、コリコリとそこを弄り始めた。

ぬちゅ、ぬちゅ♡くちゅんっ♡ぬりゅりっ♡

「あ、ああんっ！！♡♡あ、んっ……！♡」

(んっ……やっ、やだっ……！やめてっ……はずかしい、でも、気持ちいい……っ)

「うんうん、声もだいぶ甘くなってきたね」

「あ、あっ♡……ふ、♡あん、んっ♡あ、あ、あんっ♡」

(っふ……う……、もう、やだあ……っ、イっちゃうかもお……！)

「あれ、もうイきそう？大丈夫だよ、俺しか見てないから」

(っ、そういう問題じゃないのに……っ！ダメ、ダメ……っ！)

くいくい♡と引っ張られるたびに、腰が勝手に

跳ねる。

ぬちゅ、ぬちゅ♡ぬちゅぬちゅ♡ぬりゅっ♡ぬ
るっぬ♡ちゅぬちゅ♡

「んああ♡♡ あ、っ♡……ふ、うう♡ あん、んっ
あ！！♡♡」

(はっ……あ、や、やめっ……！もう限界……っ。
イっちゃう、変な声が出ちゃう……っ！) 「んっ
……あっ、ひいっ！！♡♡」

「遠慮しなくていいよ～？」

ぎゅうううっ♡ぐり、ぐりいっ♡

(だめ、ええ……っ！もう、我慢できない……イ、
イっちゃう……っ！！♡♡)

「あああっ！！♡♡ ああっ！♡♡ ああ、あ～～～
～ッ！！♡♡」

思考が、完全に彼の色に染まっていく。崩れそう
になった身体を朝倉さんが後ろからしっかりと抱き